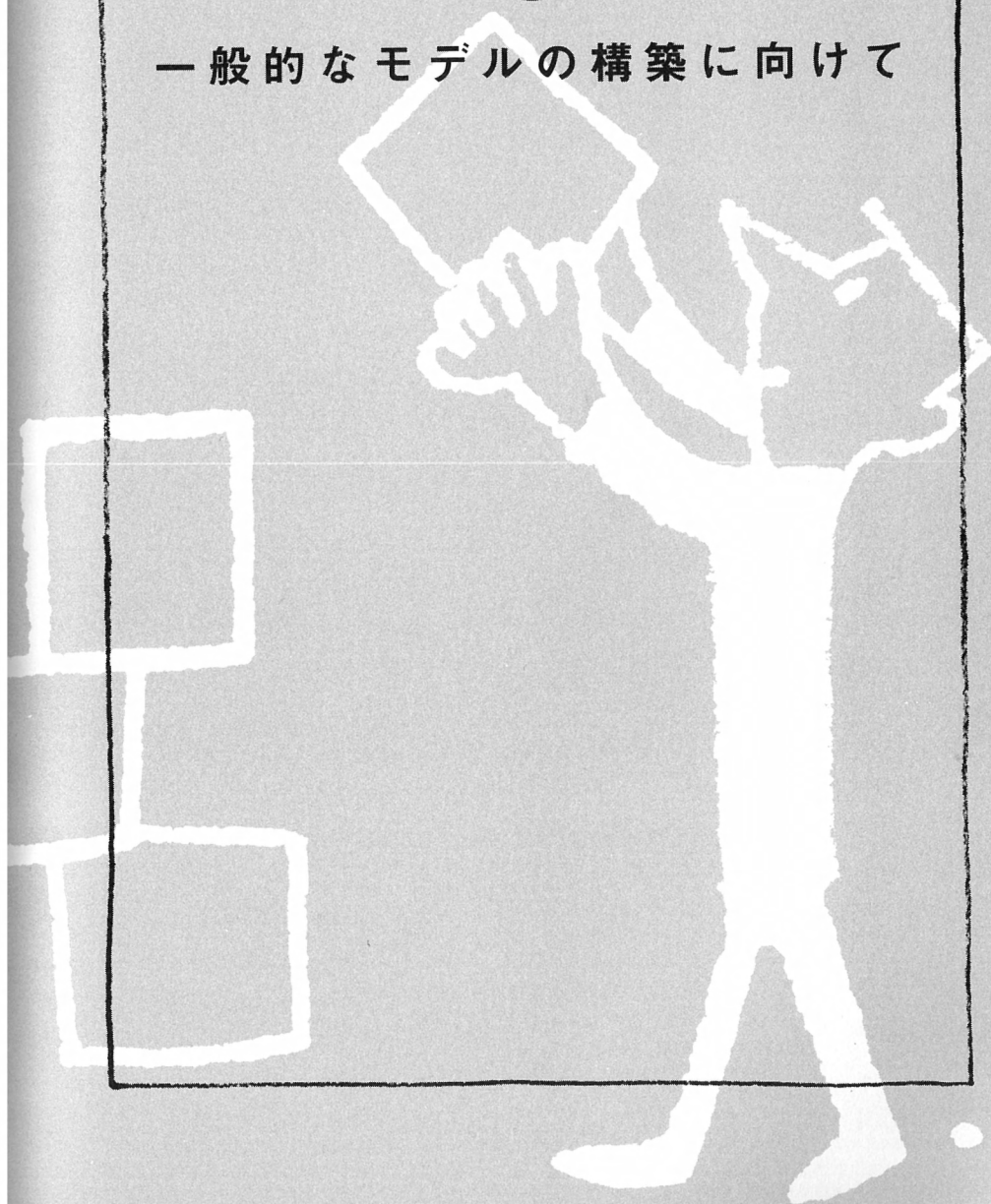
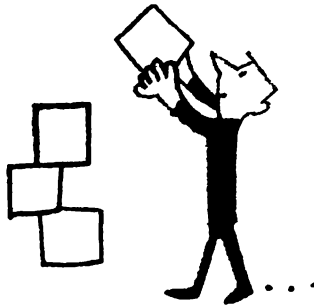


第8章

一般的なモデルの構築に向けて





フィールドに出て集めたたくさんの事例を人にわかりやすく伝えるにはどうしたらよいだろうか。思い込みや主観に流されない、説得力のある「論」の組み立て方を考えてみよう。

●キーワード：モデル化，概念化

はじめに

フィールドワークによる多くの事例研究の中には、対象となる分野や地域にとくに興味のない人たちにも読まれ、示唆を与え、議論を巻き起こすことのできた研究と、そうでない研究とがある。その違いを生む大きな原因のひとつは、提示されたモデルがどの程度、汎用性を持つかにある。「A村における20年間の農業技術変容」を対象としたモデルのように地域と時代を限定したモデルから、「中世以降の国家における権力のあり方」に関するモデルのように汎用性の高いモデルまで、モデルで説明可能な範囲は時間的・空間的にさまざまである。事例研究によって提示されたモデルが、その事例が対象としていた地域や研究内容の専門分野を超えて、より汎用性を持ったモデル、すなわち一般的なモデルあるいは理論として構築されるにはどのような工夫がありうるのかについて本章では考える。

事例研究と一般的なモデル

いったい、フィールドワークによる事例研究は、分野や地域を超えた一般的なモデルを構築することを視野に入れておく必要があるのだろうか？ 本論に入る前に、筆者の考えを述べておきたい。結論から言えば、その必要は十分にある。事例研究で得られたモデルを、事例研究が対象としていた範囲を超えて、さらに広い文脈の中に位置づけることは、事例研究が、単に研究する者によって切り取られた分析的枠組みの中でのみ存在するものではなく、互いに関連しあう現実の時間的空間的広がりの中で存在することを示し、個別の持つ意味を全体性の中で明らかにすることにつながる。一般的なモデルを構築することにより、個別の研究を世界理解のための大きな研究に橋渡しすることが可能となる。

また、フィールドワークによる研究の蓄積という点からも、一般的なモデルの構築には意味がある。フィールドワークによる研究で得られた知見は当然、その地域や当該分野の理解のために利用される。しかし、個別の事例の中で起きていることをモデル化し、他の分野や他の地域を研究する人たちに理解できるような形で提示することは、研究による知見やアイデアが、地域や分野を超えて共有可能なものとなり、それらの蓄積がフィールドワークによる研究全体の底上げにつながるからである。

一般的なモデル構築のプロセス

フィールドワークによる事例研究から紡ぎだされる一般的なモデルは、多様で複雑で例外だらけの現実の人間社会から構築されたものである。膨大なデータが抽象あるいは捨象され、そのエッセンスがさまざまな事象についてモデル化される。事象ごとのモデルが集められ、最終的に、多くの事象を統一的に説明する一般的なモデルあるいは理論として提示される。このようにして提示されたモデルや理論が、異分野や

他地域に関心のある人たちに読まれるためにはどのような工夫がなされているのか。フィールドワークによる事例研究から一般的なモデルを紡ぎ出すプロセスについて、本章では以下の文献を題材にして考えてみよう。

*1 原典は Geerts, Clifford. (1980) *Negara: The Theatre State in Nineteenth-Century Bali*, Princeton University Press. ページ数は英語版に拠る。なお、本書での引用はほとんどを邦訳に拠るが、必要に応じて著者が訳し直した。

クリフォード・ギアツ (1990) 『ヌガラ——19世紀バリの劇場国家』 (小泉潤二訳, みすず書房)*1

内容と全体の構成

『ヌガラ——19世紀バリの劇場国家』(以下、『ヌガラ』)は、アメリカの著名な人類学者クリフォード・ギアツが、自身のフィールドワークから得た資料や文献にもとづいて、19世紀インドネシアのバリにおける政治体系の原理と権力の源に関しておこなった研究の成果である。

本書を取り上げる理由は、この研究がさまざまな分野や地域の研究に大きな知的インパクトを与えたからであると同時に、事例研究からの一般化が、著者により非常に明確に意図されて書かれているからである。

まず、全体の構成からしてユニークである。

英語版総ページ数は295ページであるが、目次や引用文献、索引以外の本文が136ページ、注釈部分が121ページ、半分近くを占める。注釈部分は、通常の民族誌に比べると際立って独立している。分量が多いだけでなく、文献の批判や本文中の主題に関する一般的な議論が小論文のように記載されるなど、詳細かつ立ち入った内容の注釈となっている。研究がおこなわれた当時、植民地期以前のバリの国家という主題はいまだ総合的に扱われたことがなく、インド学や東南アジア研究、バリ研究などの専門家がこれらの注釈を研究目的に利用できるようギアツが配慮して書いたためである。

また、本文に注釈を示す番号はふられておらず、本文からでは注釈がどこにつけられているのかわからない*2。これ

*2 邦訳では、本文中に注釈があることを示すマークがつけられている。

は、植民地期以前の国家に関する政治学理論や人類学的分析などには関心を持つものの、インドネシア研究の細部にはさして興味のない専門外の読者が注釈にわずらわされることなく、ほぼ本文だけで内容を理解できるようギアツが配慮した結果である。

これらのことは、バリ研究の専門家たちだけでなく、政治学や人類学に関心のある人たちも専門の枠を超えて読めるよう、配慮がなされていることを示している。『ヌガラ』の日本語版へのギアツによる序文にはそのことが明確に記されている。

そもそも本書を著したのは、極めて特異な離れ小島の、かなたに消え去った小政治体系の把握のため—その政治体系の原理と権力の源を理解するためであった。しかしそこに見出されたものが、まず第一に、植民地期以前のインドネシアにその名を知られた強大な国家—マタラム・マジャパイト・シュリービジャヤ—の理解のため、第二にいわゆる「東南アジアのインド的国家」全般—ビルマ・タイ・カンボジア・南ベトナム・マレー—の理解のため、そして第三に西洋の中世・近世の国家の理解、さらには先植民地時代アフリカの国家の一部—エチオピア・アシャンティ・ブガンダ—の理解のためにも、役立つところがあればと願ったのである。

このように、『ヌガラ』はバリ研究の専門家だけでなく、より広い分野の人を対象として執筆された。そして、そのための最も大きな工夫が、バリを題材にして一般的なモデルを構築することであった。「劇場国家」のモデルである。本章では『ヌガラ』に沿って、一般的なモデルあるいは理論が構築されるプロセスを具体的に見ていこう^{*3}。

*3 ギアツは「ヌガラのモデル」というように、「理論」ではなく「モデル」という言葉を使っている。

『ヌガラ』における研究上の戦略と一般的なモデルの意義

『ヌガラ』における研究上の戦略は、フィールドワークから得た資料と文献にもとづいて、19世紀バリの詳細な姿を描き、概念的に精確で実証的なモデルをバリの社会・文化の変遷過程について構築することであった。そしてこのモデルは、インドネシアだけでなく東南アジアのインド的国家全般における先史時代と前史時代を理解するためのおおまかなガイドラインであることを目指しており、本章で言う一般的なモデルあるいは理論に相当する。

19世紀のバリという個別の事例から、時間的にも空間的にも広範囲を対象とした一般的なモデルを構築することは可能なのだろうか。

ギアツは可能であることの根拠として次の2点を挙げる。19世紀のバリは14世紀後半のバリと十分な連続性が見られること、そして、バリの国家はかつて広く見られた統治体系の一例であり、19世紀のバリから抽出したモデルを広く適応して、インド的インドネシアの発展史の理解を進めること、さらには、バリと似た制度群である5～15世紀東南アジアのインド的国家群を理解することが可能であるとする^{*4}。

ただしギアツは、モデルのもつ有効性と限界について明確な考えを記している。彼によれば、モデル自体は抽象物であり、観念的な存在物である。劇場国家のモデルは、19世紀バリの国家の実態と比べて単純化され理論的に偏りがあるが、他方、比較的理解が進んでいない（がおそらくはバリと似ていたであろう）上記のような制度群を理解するための指針であるという。

そして、バリの事例を使って構築されたモデルを他の地域に適用するときの注意点としてギアツは次の3点を挙げている。第1に、バリの姿は歴史により変容を受けていること。第2に、ある信仰や慣習、制度がバリ以外の地域に存在した

*4 バリの歴史の連続性に関しては、研究者間で共通の見解があるわけでない。『ヌガラ』批判のひとつが、この歴史性の解釈にある。

という証拠はその地域から見出されなくてはならないこと。バリと似たような地域にそれらが存在したと仮説を立てることは問題ないが、実際に存在したかどうかはバリの例からだけでは不明であること。そして第3に、バリの中でも文化的生態的な違いが大きく、地域性を考慮する必要があること。したがって、バリの事例から構築されたモデルを他の地域に適用する場合、バリの例を時間的にも空間的にも修正を施した上で利用すべきであると述べている。

筆者は、フィールドワークにより形成される一般的なモデルは仮説的であると同時に段階的に構築されるものであり、さまざまな事例により修正されるべきであると考える。フィールドワークによる研究では、事例研究の数だけモデルが存在しうる。事例研究では、その事例をとりまくより大きな文脈の中に研究を位置づけることにより、その事例の持つ意味がより明確になる。したがって、個別の事例から構築されたモデルは、単にその事例のみを説明するだけでなく、より大きな文脈の中での位置づけをも考慮されるべきである。そのようなモデルが多数蓄積され、相互に有機的なつながりを持ちつつ比較されることで、モデルそのものがより精密になるだけでなく、モデルの汎用性が、地域限定型のモデルから広い範囲に適用可能な一般的モデルにまで、段階的に向上すると考えられる。

劇場国家モデル構築のプロセス

『ヌガラ』において、劇場国家モデルはどのような過程を経て構築されているのだろうか。モデルの形成には、まず膨大なデータをどのように抽象化していくかが問われる。劇場国家モデルが形成されるまでには、実際には何段階もの抽象化の過程が存在するが、大きく3段階に分けて考えるとわかりやすい。第1段階は、個別データから、モデル構築にとって、より本質的なデータを選びだし例外的なデータを捨象する段

階。第2段階は本質的なデータから、ある事象を説明するときの基本的な原理をエッセンスとして抽出する段階。この第2段階は大きくふたつに細分できる。前半では、第1段階で選択された本質的データから、さまざまな事象ごとにエッセンスを抽出し個別のモデルを構築する。後半では、多数の個別モデル群を統合し、互いに異なるように見える多くの事象を統一的に説明することのできるエッセンスを抽出する。この第2段階の前半までは、前章で述べた事例研究のモデル化のプロセスと同じである。そして第3段階では、第2段階で抽出された、いわばエッセンスの中のエッセンスを一般的なモデルとして提示する段階である。

第1段階—本質的データの選択と例外的データの捨象

劇場国家モデルは、儀礼や儀式、神話、親族体系、社会組織、地形、水利、税制、通商など、さまざまな分野にまたがる膨大なデータから構築されている。バリの宗教や親族体系、経済変容などのトピックについて、ギアツはすでに多数の論文や本を書いている。しかし、劇場国家モデルはそれらすべてのデータが網羅的に組み合わせられた結果できたものではない。『ヌガラ』本文での説明は、多くのデータや情報がギアツによってすでに篩^{ふるい}にかけられ、矛盾がないよう単純化し、秩序だてて、図式的あるいは模式的に示されている。ある社会組織の用語をバリの一地方で使われているものにかなり恣意的に標準化して利用したり、灌漑組織の実態を大幅に一般化して説明したりしており、ギアツ自身、現実はあまりにも多様であり細部にこだわりすぎるとすべてに整合性のとれた議論をすることができないと述べている。

前章で述べたように、膨大なデータ群の中で、本質的なデータとそうでないデータの区別は、対象としている事象を説明する基本的な原理の中で、それぞれのデータがどのように位置づけられるかによって判断される。データそのものに本

質的あるいは例外的な意味があるわけではなく、それらを使って構築されるモデルにとって有用かどうかという観点から、例外的であるかどうか判断される。データの持つ意味は決してひとつではなく、ある事象にとって例外的であっても、別の事象を説明するときに重要な意味を持つかもしれない。個々のデータが本質的であるかどうかは、常に全体構造の中で考える必要がある。

第2段階—エッセンスの中のエッセンス

第2段階は、取捨選択されたデータから、研究対象としている事象を説明するための基本的な原理、すなわちエッセンスを抽出する段階である。この段階は、一般的なモデル構築という観点から考えると、大きくふたつに分けるとわかりやすい。前半は、第1段階で選択されたデータからエッセンスを抽出し、個別の事象についてモデルを構築する段階である。第2段階の後半では、そうして得られた個別のモデルを集めて統合し、さまざまな事象を統一的に説明するためのさらに本質的なエッセンスを抽出する過程である。すなわちエッセンスの中のエッセンスを抽出する作業である。

『ヌガラ』では、このふたつのエッセンス抽出過程が見て取れる。図8-1は、1906年までのバリのある一地方における王族の出自の系譜を、第1段階の処理を経て、単純な図式にまとめたものである。図8-1の中央の縦のラインが1380年頃から1906年に至るまでの王の直系をあらわす。このラインを下に行くほど現在に近く、したがって最も下にあるXIX代の王が最も新しい王である。底辺に書かれている27の名前は政治的に重要な貴族の家々であるが、現在の王に出自が近いほど中央にあり、遠いほど（すなわち過去の王の出自に近いほど）両サイドに配置されている。そして、王国内における政治的な地位は中央ほど高く、両サイドに行くほど逆に低いことを示している。すなわち、王国内部の政治的地

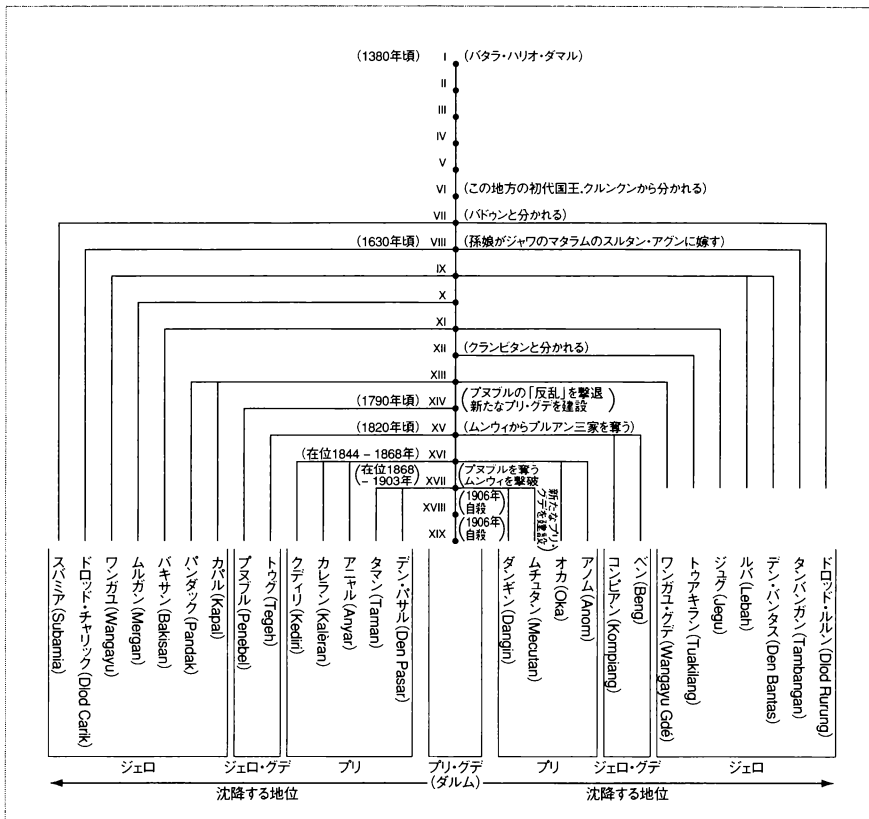
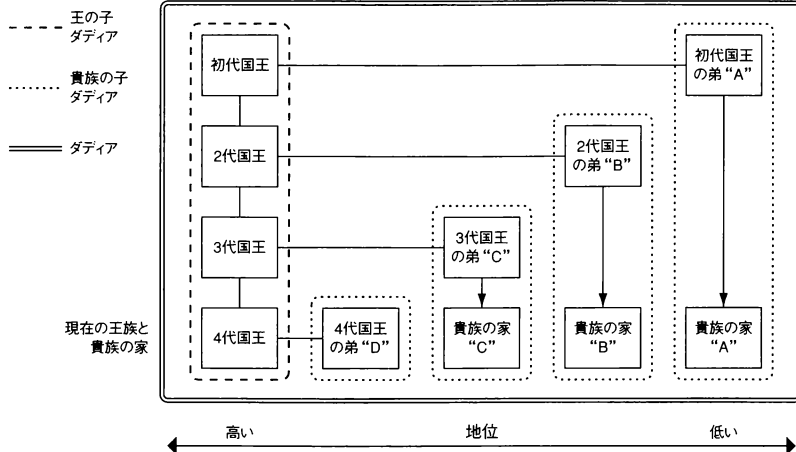


図8-1
タバナン王族のリニジ
出所：『ヌガラ』図3
をもとに作成

位は出自により決定され、その地位は現在の王に近いほど高く、遠い（過去の王に近い）ほど低い。これが、貴族の出自と政治的地位の関係のエッセンスである。

図8-1の現象を説明する基本的な原理を、ギアツは図8-2のようなモデルによって説明する。政治的地位は、出自が現在の王に近いかどうか重要であり、時間が経つにつれて、政治的地位は下がる（沈降する）。そして、ギアツはこのモデルを地位沈降のパターンと呼んだ。ここまでが、第2段階前半のエッセンス抽出と事象ごとのモデル構築のプロセスである。

しかし、図8-2は基本的な原理を表しており、19世紀バ



りにおいて実際に機能した政治のメカニズムはこれより複雑であり、地位沈降のパターンによって決定される貴族の政治的地位に依じて、実際の政治支配がおこなわれたわけではなかった。政治的に重要な家々は、政治的影響力を持つと互いに競い合い、派閥を形成し、さまざまな合従連衡を繰り返した。貴族の出自でない家が、実際の政治的な影響力という点で、貴族の中でも指導的地位を占める家に匹敵することさえあった。バリの支配階級は細分化されており、構造的に脆弱であった。

実際に起きていることが基本的な原理では十分に説明できないというような場面に、フィールドワークによる研究ではしよっちゅう直面する。この一見混乱を生むような事柄をどう考えればよいのだろうか。基本的な原理が間違っているのであり、修正する必要があるのか。実際に起きていることが例外的であり、個別の取り扱いをするのか。あるいは、それらとは全く別の理解の仕方が存在するのか。この判断は、それぞれの研究の場面に応じて慎重におこなう必要がある。

『ヌガラ』ではこの場合、基本的な原理を修正することも、

図8-2 上流階級の出
自—地位沈降の原理
出所：「ヌガラ」図2
をもとに作成

実際に起きていることを例外として捨てることもせず、その両方を取り込んだモデルを構築する方法を採用した。より正確に言えば、両方を統一的に理解できる解釈を与えた。

ギアツによれば、ここで例として取り上げた一地方の国家においては、政治的正統性は最高君主ないし国王に始まり、小君主を経て、一介の村人に到達しており、国家構造の頂点から下へと組織されているかのように見えた。しかしこの国家を、支配の体系つまり命令と服従の構造として検討するならば、全く異なった像が浮かび上がるという。権力は権威の頂点から流れ落ちる、ないしは中央から湧き出て広がるというよりは、頂点に引き上げられる、ないしは中央に引き込まれるように見えるのである。統治権は、臣下から小君主へ、小君主から君主へ、君主から国王へとあけ渡されていた。権力は上から割り当てられていたのではなく、下から積み上げられていたのである。この国家は構造的に見れば、さまざまな組織がさまざまな相互関係を持ち、連合体としてひとつにまとめられている国家であった。

支配の組織と実態との関係を、このように上から下（あるいは内から外）に向かう統合の動きと、下から上（あるいは外から内）に向かう拡散の動きの両方があったというふうなエッセンスとしてまとめると、これは、19世紀バリの他の現象にも当てはめることが可能になった。同様の原理が、稲作をめぐる国家と儀礼の関係や、通商の形態などにも見出されたのである。

たとえば、バリの稲作における国家と儀礼の関係についてである。バリの人びとにとって水田水稻作はきわめて重要な生業であり、そのための水管理、なかでも灌漑操作は、バリの水稻生産におけるもっとも重要な農作業であった。水稻生産に十分な雨量があり傾斜地の多いバリにはスバックと呼ばれる有名な灌漑組織があり、単一の大水路により灌漑される棚田全体を管理していた。スバックはその内部に国家が所有

し管理するような水利施設を一切もたず、したがって、独立して域内の灌漑操作をおこなうことができた。スバックは、灌漑水を平等に分配するために、灌漑水の受益者によって協同で運営される組織であった。水田水稻作における生命線である灌漑水を管理するからといって、スバックは領域内部を専制的に政治支配するような組織ではなく、灌漑操作とそれに伴う農業に関する諸決定も、君主ではなくスバック内の農民自身がおこなっていた。スバックはそれぞれが技術的に独立した組織であり、そうした構造的に等位な単位が組み合わさってバリの灌漑体系が築き上げられていた。実質的な水管理や営農は灌漑体系の最下位の次元で組織され、その連合体がバリの灌漑制度を実質的に運営していた。

灌漑の社会経済制度が最下位から構築されていたのに対し、稲作儀礼は、この灌漑体系の頂点の次元から始まっていた。稲作儀礼は9つの主要な段階からなり、稲の生育にあわせて順次とりおこなわれた。灌漑体系の頂点、すなわち、複数の河川を含む領域全体を範囲とする最初の全体的通水儀礼がバリ島全体の中心的寺院においてとりおこなわれると、儀礼がとりおこなわれる場所は灌漑体系の中の下部に向かい、河川全体の範囲、スバックの範囲にて日をずらして順次おこなわれた。また、通水儀礼の開始日は、単一の河川沿いに見ると、山から海に向かうほど遅く設定され、通水儀礼に続いてとりおこなわれる8つの儀礼も、河川の上流から下流にかけて順次とりおこなわれた。そのため、稲作儀礼は、ひとつの水系の上部から下部に向かって順次とりおこなわれると同時に、スバックのような、水系から分かれた支流で形成される灌漑のひとつの単位の中でも上部から下部に向かって順次とりおこなわれ、その結果、全体として、相互に調整され自己運動しているような、精密な儀礼体系が構築されていた。

儀礼の体系が作る相互調整の全体的枠組みによって、中央集権的国家の強制力を行使せずとも、スバックによって構成

される領域全体の水管理と水稻生産は秩序あるものとなった。灌漑のための実質的な制度は下から上へと構築されていたのに対し、稲作の儀礼は上から下へに実施されており、先に述べた国家の支配体系と同様、稲作をめぐる国家と儀礼の関係もまた、上から下に向かう統合の動きと、下から上に向かう拡散の動きの両方があったといえる。

上から下に向かう統合の動きと、下から上に向かう拡散の動きの両方があるというギアツの考えは、『ヌガラ』の各章でさらに精緻化される。先に述べた国家の支配体系や、稲作をめぐる国家と儀礼の関係のほかに、さまざまな社会的関係や通商形態、税制、小作制度など19世紀バリの社会経済の主要な分野が網羅的に分析の対象となる。また、国家の儀礼や儀式、宗教的シンボルに対して、ギアツ独特の文化の解釈がおこなわれる。そして、これらすべての社会経済的・宗教的現象が、拡散と統合の動きによって統一的に説明される。上から下へ向かうのは、従来から言われているような暴力を基礎とするような権力の支配的な側面ではなく、儀礼や儀式を模写することで伝わる文化的な次元であること、下から上に向かうのが、地理的条件や習慣、歴史的な背景に由来するきわめて競合的な政治原理であることを示し、最終的にギアツは19世紀バリのエッセンスのエッセンスを次のようにまとめる。

19世紀のバリの政治とは、対立する2つの力—すなわち模範的国家儀礼の求心力と、国家構造の遠心力—の間の、張りつめた緊張関係であるとみなすことができる。

第3段階—エッセンスから一般的なモデルへ

これまで本章ではエッセンスとモデルとを使い分けて説明してきた。基本的に同じものを指しているが、エッセンスは

ある事象を説明するときの中核になる部分であり、基本的な説明原理であることは述べた。これに対して、モデルはエッセンスの表現型である。したがってエッセンスとして抽出されたものを、あるときは文章で、あるときは数式で、またあるときは図で表現することになる。

第2段階でエッセンスのエッセンスが抽出された。第3段階はそれをモデルに変換する段階である。19世紀バリの政治体系のエッセンスのエッセンスが、劇場国家のモデルとして以下のように表現される。

この国家が常に目指したのは演出であり儀式であり、バリ文化の執着する社会的不平等と地位の誇りを公に演劇化することであった。バリの国家は、王と君主が興行主、僧侶が監督、農民が脇役と舞台装置係と観客であるような劇場国家であった。数百いや数千の人々と大量の富を動員しておこなわれた、華麗極まる火葬や削齒儀礼や寺院奉献式典や巡礼や血の供儀は、政治目的のための手段だったのではない。これらの儀式はそれ自体が目的であり、そのために国家があった。宮廷の儀礼主義が宮廷政治の推進力であった。集団儀礼は国家の基礎を固めるための仕掛けではなく、むしろ国家が、その今わの際きわにおいてさえ、集団儀礼上演のための仕掛けなのであった。祭儀が権力に仕えたのではなく、権力が祭儀に仕えたのである。

劇場国家モデルは、第2段階で抽出されたエッセンスの中のエッセンスの表現方法と比べて、何が違うのだろうか。エッセンスもモデルも、いずれもバリの政治についての要約のはずである。しかし、前者はバリ政治体系の要約であり、後者は国家に関する新しい見方を提示していると読むことができる。前者では、「模範的国家儀礼の求心力」とか「国家構

造の遠心力」といった、これまで本書を読んでいたのに対し、後者では、国家に関する新しい見方が存在することを示している。すなわち、通常、国家権力は上から下に強制的・暴力的に執行され、国によりとりおこなわれる儀礼や儀式はその権力を補う装置であるという一般的な見方とは全く異なり、劇場国家では、国家権力という政治的支配の実質的内容と、儀礼・儀式のような外面的装飾部分とが逆転していることを示している。19世紀バリを対象とした事例研究から、バリの政治体系に関する新しい知見が見出されただけでなく、一般的な関心も高く学問的にも大きなテーマである国家観に関する新しい知見が付け加えられたことを劇場国家モデルは示しているのである。

*5 その他に、「権力の文化的次元」、「国家の記号論的側面」という表現も使われている。

バリの政治体系の分析で見出され、従来の政治研究ではあまり取り上げられていなかった事柄は、ギアツの言葉によれば、国家権力の象徴的次元である^{*5}。このことをバリ研究者以外の人に伝えるために、劇場国家のモデルでは、「国家構造の遠心力」よりも「模範的国家儀礼の求心力」に関わる儀礼や儀式の持つ意味がやや強調して表現されている。モデルがエッセンスの表現型である以上、とくに言葉によるモデルでは、魅力的な言葉で表現することができればそれに越したことはない。「劇場国家」というモデルは、どこか使ってみたくなる要素を持っている。

モデルが一般的な命題として受け入れられるかどうかは、書き手の問題であると同時に、使う側の要素も大きい。第2次大戦後に現れた東南アジアの国民国家をどう考えるかに関心が高まっていたという時代的な背景が、劇場国家モデルに対する多くの評価（と批判）につながったのだとも考えられる。このことは、現代的な課題を扱うフィールドワークによる研究では気に留めておいてもよい。グローバル化、環境問題、戦争、資源利用など、全地球的に対処すべき現代的な課題群に対し、フィールドワークによる研究がどのように貢献

できるのかを考えることは、一般的なモデル構築の段階だけでなく、研究課題の設定やデータの取得、分析、エッセンスの抽出などすべての過程で研究の方向性を決定する重要な指針となる。

まとめ

劇場国家モデルが構築されるまでの過程を題材として、事例研究から一般的なモデルが構築されるまでの過程でどのような工夫がなされているのかについて本章では考えてきた。

要点をまとめてみよう。まず、フィールドワークによる研究における一般的なモデルは、詳細なデータを収集した事例研究の上に成り立つことが明らかである。本章で見たように、ギアツの劇場国家モデルにはフィールドワークにもとづいた膨大なデータの蓄積があり、決して机上で形而上的に思念されたものではなかった。

ただし、モデルが構築される過程は、事例研究の最初の段階と比べると、傾注すべき労力の方向性は異なった。事例研究を開始した当初はさまざまなデータを細大漏らさず収集し分析しようとするのに対し、モデル構築の段階ではデータをどのように抽象あるいは捨象するかが大切であった。膨大なデータ群を前に、ある事象の解釈にとって本質的なデータとそうでない例外的データを分類し、本質的なデータから基本的な原理をいくつか探し出す。その上で、研究対象をさまざまな側面から統一的に説明できるような解釈、すなわちエッセンスのエッセンスを抽出し、最終的に一般的なモデルを構築した。

さらに、エッセンスのエッセンスから一般的なモデルを構築するときには、事例研究で見出された新しい知見が、その事例研究にとってだけでなく、より一般的なテーマにとっても新しい知見であることを示し、事例研究そのものには関心のない人にも理解できるよう表現することが大切であった。

以上、本章では19世紀バリの事例研究から劇場国家モデルが構築されるまでを辿ってきたが、それは、劇場国家モデルが構築されるまでのギアツの思考過程を再現したものではない。書かれた『ヌガラ』を材料にして、ギアツがどのような言葉でエッセンスをまとめ、最終的に劇場国家のモデルにまで到達したのかを、抽象度の低い個別のデータから抽象度の高いモデルに至るまで段階的に遡ってみたのである。モデルが構築されるまでの実際の思考の過程はもっと複雑で、モデルの構築は、事例研究をスタートする段階ですでに始まっているといえる。また、どのようなモデルを構築するかも、研究者の能力や資質が大いに影響する。ギアツの場合、膨大な量の文献を渉猟していることに加えて、本書でバリ政治の本質を模範的国家儀礼の求心力と国家構造の遠心力との緊張関係であると要約したり、別の研究で植民地化される以前からのジャワの社会経済的変容を農業インヴォリューション^{*6}と呼んだりするなど、社会的文化的過程のイメージ化に秀でており、そのことが、モデル構築に役立っているのかもしれない。また文学的哲学的素養が本文のあちこちに顔を出し、モデルによる説明をより説得的なものにしているが、逆にそのことが批判の対象となることもある。

ギアツの思考過程や説得力の源泉についてはさておき、一般的なモデルの構築はフィールドワークによる研究の必要性を高めこそすれ、低めることはない。個々の研究者が有するすべての資質を使い、モデルによる新しいものの見方、考え方を見出すことがフィールドワークによる研究ではきわめて大切である。フィールドワークによる研究は、狭い範囲を対象にし、少数の読者を想定するような個別に特化した研究なのではなく、事例から見出した知見を、より一般的な文脈で説明することを志向する研究である。

(柳澤 雅之)

^{*6} Geerts, Clifford (1963) *Agricultural Involution: The Processes of Ecological Changes in Indonesia*, University of California Press. 邦訳はクリフォード・ギアツ (2001) 『インヴォリューション——内に向かう発展』(池本幸夫訳, NTT出版). 本書も1970年代以降、大きな議論を巻き起こした。